

ISSN 0919-1518

一九九八年三月

文化財學報

第十六集

岡田英男・古原宏伸先生送別記念論集

奈良大学文学部文化財学科

文化財学科の両輪が去られる ―そのさびしさの中で

この春はさびしい春です。文化財学科の教員や学生の胸の奥底にボカッと空洞ができた、頭の脳心に白濁の想ひがつきまとう、そうした春です。今日の行方定まらぬ世紀末の世情にも似た状況が学科をとりまいています。ことの起りは古原宏伸先生、岡田英男先生のご退職にあります。古原先生は奈良大学創立以来の、また文化財学科設置当初からのご在職で、実に大学の歴史そのもの、およそ三〇年の長きにわたって大学・学科の運営にご盡力下さいました。今日の文化財学科をつくり上げる原動力として、真剣に学生を誉め、真剣に学生を叱られ、筋の通った学科生を育成されました。毎年の海外研修も先生が引率下さる場合が多く、その度びごとの報告は、学問をする心、学問する態度の根底を現地できりと植えつけようとされる配慮の行き届いたものであったと語られています。

先生はここ十年程、眼を病まれ、やや色のついた眼鏡をかけられる御姿を拝見するようになりました。目は学者の生命。とくに美術史、それも中国絵画史を専攻される先生にとって目は…と心配いたして居りましたが、決して研究上不便でねとは仰言いませんでした。淡々とご厚誼いただくという形で時間は経ちました。一時、先生が少し太られたなと皆で話したことがあります。この頃から腰痛が先生を襲い始めたようです。目と腰は学問する者にとっては最も肝心のところ、先生の倦まず絶えず日々進展される学問へのおとりくみが、結果、こうした目や腰にかえて大きな負担をかけることになったのではないかと思います。先生はここ数年、ご退職の準備を一人でコツコツ進められていたようです。月曜の朝など、研究室の扉の前や研究棟の隅に片付けられた紙や未使用のカードなどが積まれるようになりました。一部の学生はそのカードを頂いたり…先生のご退職の日が近いのではと心配する声がありました。事態はその危惧の通りとなりました。平成九年正月すぎ、先生は退職を決定したとその届けをなさいました。学科で相談し大学院博士課程後期の設置要員であられることを理由に在任をお願いいたしました。京都へ参上し、大学の籍ははずすとしても大学院だけはと…先生は穏やかな声で「判りました」と仰言って下さり、参上した私としてはホッといたしました。最後まで先生には御迷惑をお掛けすることになりました。申し訳ないことです。

文化財学科の一つの柱、「文化史」担当の教員として、私たちが白羽の矢を立てたのは奈良国立文化財研究所飛鳥藤原調査部長であられた岡田英男先生でした。温厚な人柄は誰しも認る所、その業績は法隆寺諸堂の解体修理の歴史そのもの、まさに油がのられて南都の諸社をめぐる

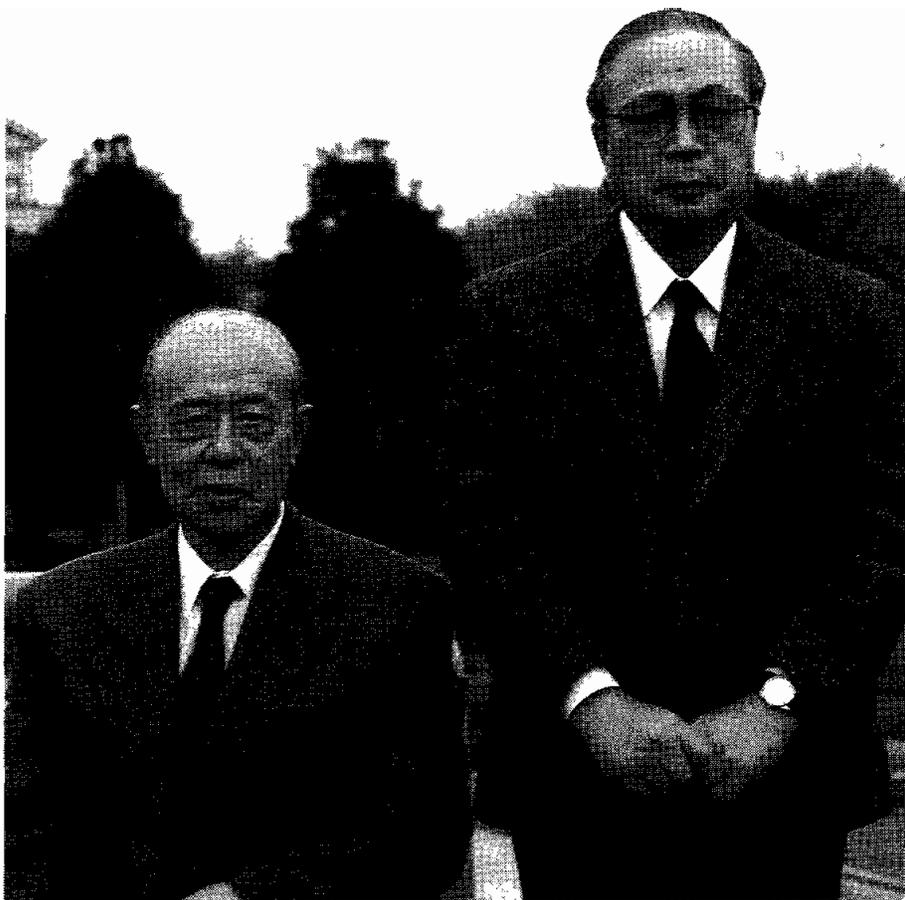
ご著作の続々のご発表、本学へのお越しはむつかしいかなと思案しながら参上しました。「いいよ、いくよ」のあっさりした御返事。しかし、研究所が先生の離任を認めて下さるか否か。鈴木嘉吉所長は「所員がドンドン大学へ大学へと出てしまう。困ったことだ。しかし岡田さんから聞いたよ。条件は…」とのこと。岡田先生の根回しのよろしきを得てご来学が決り、安堵しました。先生は長い行政畑のご経験を学科に植えて下さいました。時に柔軟に、時に剛直、事態のいろいろな場面で実に多くの生き方を教えて下さいました。文化史の中心を建築におき、その長い修理工事の成果を織りませた講義は多くの学生に深い感動を与えました。一方では大阪府文化財保護審議会会長、兵庫県・奈良県・和歌山県文化財保護審議会委員をつとめられるほか、実に多くの市町村や各種委員会の委員を引き受けられ、その多忙さは目を見張らせるものがありました。先生は非常に誠実な方ですから常にそうした会の中核となられ、本当に真剣にとり組まれました。平城宮朱雀門、唐古・鍵遺跡望楼、上淀庵寺伽藍などの一連の復原工事は先生の忙中一層忙しくするものでしたが、これらは指定建造物の調査・修理と相俟って先生の大切な御仕事でした。先生は忙しければ忙しい程、お元氣、少し赤味がかったお顔で私達を鼓舞して下さいました。

その岡田先生が突然の脳梗塞、言葉もない衝撃でした。平成八年五月十九日のことでした。暫くして先生の左半身、腕・脚の不随という病状が判明しました。定年まではあと二年、いよいよ大学でのラストスパートだと仰言って居られただけに無念の想ひが先生にも私達にも…。それでも病状の間を縫って講義も卒業論文の諮問も車イス、奥様におつき頂きながら続けて下さいました。一年をのこしてのご退職が伝えられ、三月最終の教授会では、先生から逆に私共が「くれぐれも身体に氣をつけて…」といったわれ、また最終講義もつつがなく終えられました。

古原宏伸先生、岡田英男先生のご退職は活氣溢れる文化財学科に強いきさびしさを生みました。いかにして文化財学科を新たな学科に甦らせるかが問われる今日です。しかし、新年度には新たな人事も内定し、ようやくにして両先生に新しい学科の姿を見て頂けるようになりました。ご退職後も氣やすく心やすく学科へお越し下さいますよう、ご健勝の程お祈り申し上げます。長年本当にありがとうございます。

平成十年三月二十五日

奈良大学学長
文化財学科教授 水野正好



岡田英男先生（左）、古原宏伸先生（右）御近影